

---

# 海牛

坂田火魯志

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

海牛

### 【Nコード】

N8068E

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

オホーツク海とベーリング海の間の広い海。そこを調査していた調査隊が出会った不思議な生き物とは。実際に目撃したという報告があります。

## 第一章

海牛

オホーツク海とベーリング海の間の広い海。凍て付いたこの海に今一隻の調査船があった。乗っているのは日本人とロシア人だった。彼等はこの海の生態系の調査でここに来ていた。

黄色い肌の小柄な者達と白い肌の大柄な者達がそれぞれオレンジの救命胴衣を着けて船の上にいる。そうしてあれこれとオ折が漂う海を見回しながら話をしていた。

「ラッコはどうですか？」

「そうですね。今のところはまだ」

大柄で眼鏡をかけた青い眼の男に黒髪を後ろで束ねた切れ長の目の妙齢の女が答えている。外見から男がロシア人であり女が日本人とわかる。

「見かけませんね」

「この辺りにはいませんか」

「はい、もつと南です」

女ははつきりとした声で男に答えた。氷があちこちに漂う海の上を調査船が静かに進んでいる。その船の甲板から海を眺めながらの言葉だった。

「この時期ラッコがいるのは」

「だといいのですがね」

男はそれを聞いてまずはいぶかしむ目になった。

「それですと」

「ラッコがいなくなったと思われているのですか？」

「その危険は否定できないでしょう」

彼は流暢な日本語で女に対して語った。

「最近この辺りも生態系が壊れてきています」

「それは確かに」

海牛

彼女もまたその言葉に頷いて答えるのだった。その強く端正な目の光を曇らせて。

「特に近年は」

「漁師達だけの問題ではありませんからね」

男の言葉が次第に曇ってきた。鉛の色をした如何にも冷たそうな海を前にして。

「やはりこれは」

「地球規模のですね」

「その通りです。もっともそれを調べる為にここに来たのですが」

「はい」

女はあらためて男の言葉に頷いた。

「その通りです。私達は」

「大山田さん」

男は彼女の名前をここで呼んできた。

「貴女もやはり近年のこの海が危機にあると思われていますね」

「その通りです」

今度もはつきりとした言葉だった。

「これは。かなり」

「ラッコだけではありませんからね」

男の言葉はさらに続く。憂いもまた。

「セイウチもトドも。かなり」

「魚もまた減っています」

「何もかもが減っています」

彼はこう言つて海を見る。今彼等の目の前には何の生き物もない。その鉛色の海と白い氷があるだけだった。空もまた鉛色で暗く沈んでいる。オーロラさえ見えそうだった。

「ここでは」

「では今回もまた」

「でしょうね。報告は悲観的なものにならざるを得ません」

暗い顔でその大山田に述べた。

「残念なことです」

「ヴィシネフスカヤさん」

今度は大山田が彼の名前を呼んできた。

「何でしょうか」

「一旦中に戻りましょう」

「中ですか」

「はい、交代の時間になりました」

こうヴィシネフスカヤに言うのだった。

「ですから後は交代のペアに申し次をして」

ここに来ているのは彼等だけではない。日露の学者達がこの調査船に乗り込み調査に当たっているのである。丁度その海の調査の時間の交代となつたのである。

「それで後は」

「中で休みますか」

「ウオツカが待っていますよ」

大山田は静かに笑つて彼に述べた。

「ですから」

「ウオツカですか」

「ここに居続けていればそれだけ身体を冷やしてしまいます」  
また彼に言う。

「ですから。休憩の時はやはり中で」

「ウオツカで身体を暖めると」

「食事もありますし」

ここでは少し笑みが深くなった。

「それで一息つきましよう」

「そうですね」

ヴィシネフスカヤも笑顔になった。あまり深刻な顔のままにいるのにも疲れたのだろうか。その顔に綻びが入るとそれで話が進むのであった。

「ではそういうことで」

「それでは」

こうして二人は船の中に入った。船の中にはベッドや小さなテーブルに船体にそのまま付けられた椅子といったシンプルな生活用具がある。そこに三人程度詰めている。二人は階段でそこまで降りたのだ。すると二人は残っていたその面々に手を振られて声をかけられたのであった。

「おかえり」

「御飯ね」

「ええ、そうよ」

大山田がにこやかに笑って彼等に答える。やはりそこにいるのもロシア人と日本人だった。彼等はそれぞれの手にパンや酒を持って楽しくやっていた。

「ウオツカあるわよね」

「あるよ。ほら」

金髪の若い女性が二人に瓶を出してきた。透明の酒がそこにある。

「ピロシキもあるわよ」

「缶詰めもな」

「鯨あるかしら」

大山田はにこりと笑って彼等に言ってきた。

「鯨の缶詰めも持って来てる筈だけれど」

「ええ、これね」

その若い女が早速テーブルの下から出してきた。日本語と鯨のイラストが目につく。

「そうそう、それぞれ」

「どうぞ。それにしてもこれって」

「何？」

「結構美味しいわね」

にこりと笑って大山田に答えてきた。

「鯨って」

「そうでしょ。ロシアでは鯨は食べていいのね」

「ロシア人は他人が何食べようと文句は言わないわよ」

彼女はこう大山田に述べるのだった。

「アメリカ人とは違うわ」

「そうね、それはね」

ロシア人の美徳の一つでもあるのか。大山田もその言葉を聞いてまた笑みを浮かべる。

「有り難いわ」

「じゃあゆつくり休んでええ」

「二人共今日はこれで終わりよね」

「ああ、そうだよ」

ヴィシネフスカヤはもう座っていた。そこで受け取ったウォツカの瓶を開けながら答えている。やはりウォツカが好きらしい。ここにことした顔になっている。

「我々はね」

「じゃあ後はしこたま飲んで寝るだけね」

「ウォツカってあれよね」

大山田も椅子に座る。そこで彼女もウォツカの瓶に手をかけていた。

「ちよつと飲んだらそれですぐ寝られるのよね」

「そうかな」

だがヴィシネフスカヤはそれには懐疑的な顔を見せるのだった。

もうウォツカをガラスのコップにこぼこぼと入れている。そのままストレートで入れている。

## 第二章

「少なくとも瓶一本はいけるかな」

「それはロシア人だからよ」

大山田は苦笑いを浮かべてこう答える。彼女もまたガラスのコップにウオツカを入れるがその勢いはヴィシネフスカヤのそれと比べるとやや遅いものだった。

「ロシア人は強いわね、やっぱり」

「飲まないとやっていけないんだよ」

ヴィシネフスカヤはそれに応えて言う。

「とてもな」

「とてもなの」

「寒いからな」

やはりそれだった。ロシアらしかった。

「凍えるんだよ、ここだってそうだろう？」

「まあね」

大山田は彼の言葉に答えながらウオツカを一口飲む。早速焼けるような感じが身体中を支配していく。ウオツカならではであった。

「確かに。少し飲んだだけで」

「これがないと本当に生きていけない」

その言葉が実にリアリティのあるものだった。

「ここでもな」

「そうね。暖まらないととても」

彼の言葉に頷きながらまた口に含む。それから今度はピロシキを手を持った。

「やっていけないわね」

「そうだ。そういえば」

「どうしたの？」

「この辺りだったかな」

ふとした感じで口を開いたのだった。

「この辺りって？」

「ああ、この辺りで出て来たんだ」

不意にこう言うのだった。

「あれがな」

「あれ？ひよつとして」

大山田は考える顔になった。そのうえで彼の言葉に応えた。

「ステラーカイギュウのことかしら」

「知ってるんだな」

「有名な話だからね」

大山田はピロシキ片手にヴィシネフスカヤに対して述べた。

「絶滅した筈なのに生きていたっていうのだから」

「元々個体数は少なかったがな」

「そうね」

ステラーカイギュウは丁度この辺りにいた海牛類の一種である。

九メートル近くに達し海辺の海草を食べて群れで暮らしている大人しい動物だった。ベーリング海峡が発見されると共にその姿も人間に見つかりすぐに食用にされた。そ捕らえ方が実に酷いものであった。

鉗を刺す。そうすればステラーカイギュウは死ぬ。打ち上げられたそれを取って食べるのだ。ただしこれで打ち上げられるのは五匹のうち一匹である。あとは無駄に殺されていく。

また大人しく仲間内で庇い合う為次々と集まったところを餌食となった。そうして気付けば絶滅していた。ドードーでもそうだが動物の絶滅ではよくある話だ。

これが十八世紀の話で絶滅したと考えられていた。しかしである。二十世紀後半に目撃例があったのだ。それが丁度今この調査船がいる辺りである。

「いるかしら」

「いないだろうな」

すぐに大山田に答えてきた。

「あの時いたとしてももう」

「残っていないというのね」

「ラッコもトドもここまで減っている」

ヴィシネフスカヤは他の動物も出す。実に悲しい顔になっている。

「それでどうしてステラーカイギュウがいるというのだ」

「真っ先に絶滅しているというのね」

「間違いない」

発言は断定するものだった。完全に。

「だから。期待はしていないさ」

「そうなの」

「そう。いたらそれは夢だ」

「こうまで言う。」

「それこそロシアン・ドリームだ」

「ロシアン・ドリームね」

今のヴィシネフスカヤの言葉には思わず笑みを浮かべた。もうウ

オツカが混ざって真っ赤になっている。

「そういえばロシア人の夢って何かしら」

「ロシア人の夢か」

「ええ。アメリカン・ドリームはそれこそ華やかな薔薇色の生活だ

けれど」

誰もが瞬く間に華やかな表舞台上で栄耀栄華を極める。簡単に言えばこうだ。どんなに貧しくとも実力と運でそれを手に入れることができる。それがアメリカなのだ。

「ロシアではどうなのかしら」

「ロシア人はあれだよ」

彼は笑って言ってきた。

「素朴で無欲だからな」

「じゃあ華やかな生活はいらないのね」

「穏やかに家族と暖かい部屋にいられてウオツカを好きだけ飲め

る

彼の言葉はこうであつた。

「それだけだよ」

「それだけなの」

「そう、それだけ」

にこりと笑つて答えてみせてきた。

「ロシア人はそれだけで満足なのさ」

「本当に無欲なのね」

「個人としてはね」

また随分と引つ掛かる言い方になつてきた。

「一人一人はその通りだよ」

「国だとなつたのかしら」

「ロシアという国は知らないさ」

その質問にはとぼけてみせる。

### 第三章

「国としてはね」

「そうなの」

「そうさ。それじゃあ今は」

「そのささやかなウオツカをね」

「暖かくさせてもらうよ」

こう答えてからまた楽しそうに飲む。酒を何処までも愛していた。その日は二人の担当はそれで終わりだった。次の日昨日の件に関するレポートを書き終えてから外に出た。外は海と氷、それに大地が見える。大地にはトドが見えた。大山田はそのトドを見て声をあげた。

「いるわね、ここには」

「ああ、そうだね」

ヴィシネフスカヤからもそれは見える。彼はトド達の群れを見て満足そうに笑っていた。

「いるね」

「よかったわね、ここにはかなりの数がいるよ」

「アシカもいるわ」

「ああ」

右手にはそれがいた。アシカ達は海の中を元気よく泳いでいた。二人はそれを見ても楽しく笑うのだった。彼等の存在の確認こそが仕事だからだ。

「いいことだ。あとラッコは」

「私達の後の担当のメンバーが見ていたわ」

「そうか。いたのか」

「結構いたそうよ」

こうヴィシネフスカヤに答える。

「夜でも元気にしていたって」

「それは何よりだね」

「数も結構いたそうよ」

大山田はこうも述べる。

「充分な数がね」

「そうか。思ったより状況はいいようだね」

「そうね。昨日は不安になったけれど」

「まだこの自然は大丈夫ってことかな」

「大丈夫っていうよりは」

大山田はさらに言う。

「あまり悲観的になってもいけないってことかしら」

「あまり悲観的にもか」

「そうじゃないかしら。確かに生息エリアも減ったし」

「うん」

これは紛れもない事実だった。否定しようがない。データにも出ているし彼等の目で調べてもその通りだった。だから否定できなかったのだ。

「それでも。まだこれだけがいるのよ」

「そうだね」

「そうよ。後はこれを守って」

「少しずつ戻していく」

ヴィシネフスカヤはそのトドやアシカ達を見ていた。そのうえでの言葉だった。

「少しずつだけれど」

「けれど確実によ」

大山田は確実に、と言ってみせた。やはり彼女も海の動物達を見ている。彼等は二人の言葉なぞ知る由もそもそも知る気もなく彼等の生活を営んでいる。それだけだった。

「進めていけばいいわ」

「それでいいんだね」

「それでも難しいわよ」

微笑んではいるが言葉は確かなものだった。

「その少しづつがね」

「それでも。やっていくしかないな」

「動物が絶滅するってそれだけでとても悲しいことだから」

命がなくなる、それは運命かも知れない。しかしそれが人の手で無造作に為されるのならば悲しいことだ。二人が言うのはそれだった。

「だからね」

「ステラーカイギュウみたいなことは二度と御免だね」

「ベーリングシマウモね」

ステラーカイギュウと同じくこの辺りにいた鳥だ。やはり絶滅してしまっている。

「あんなことは二度と」

「滅ぼすのが人なら護るのも人」

「そうね。罪を犯すのも徳を積むのも人」

二人はそれぞれの言葉で述べた。

「どちらも人なのね」

「そうだよな。じゃあもう少し北に行ってみるか」

「ええ。そうしましょう」

二人はトドやアシカ達を見つつさらに北に進んだ。するとラッコ達も見えた。そのことに満足しつつさらに先に進んで。大山田はふと海辺に何かを見た。

「あら」

「どうしたんだい？」

「いえ、あそこだけねど」

ヴィシネフスカヤの言葉にその海辺を指差して言う。

「あそこに。何かいるわ」

「！？岩じゃないのかい」

彼にはそう見えた。見れば大きな岩場が二十程度ある。そう見えたのだ。

「あれは」

「そうかしら。岩場かしら」

「そうだよ。それか氷か」

彼はこうも思った。

「それだよ。よくあるじゃないか」

「まあそうだけれど」

言ってしまうえばその通りだ。今も周りには海にその氷が浮かんでいる。少し見ただけでは北極と大して変わりが無い。その海の中に大きな氷が二十程度あっても。それはごく自然の光景である。

## 第四章

しかしだった。大山田にはその氷がどうしても氷には思えなかった。それで望遠鏡まで取り出してそれで見ることにしたのだった。

望遠鏡を取り出したところで、ヴィシネフスカヤはそんな彼女に対して苦笑いを浮かべた。そのうえで彼女に対して言ってきたのだった。

「その几帳面なところは日本人かな」

「女だからかしら」

自分では笑ってこう言うのだった。

「何か見たら確かめずにはいられないのよ、女は」

「じゃあ浮気はできないな。疑われたらそれこそ」

「それは日本でもロシアでも同じではないの？」

「ロシア女は少しおおらかだよ」

笑って言葉を返す。

「日本人に比べたらね」

「そうなの」

「そうだよ。それで」

「ええ」

話が元に戻る。

「何が見えたんだい？潜水艦かい？」

「まさか。まだ見ていないわ」

望遠鏡のレンズを合わせているところだった。丁度今それが終わったところである。

「今からよ」

「そうなんだ」

「ロシア人なんでしょ。もっと気を長く持ちなさいよ」

「そうするよ。気が長いのと素朴で無欲なのはロシア人の美德だからね」

「聞いていると随分いい人達なのね、ロシア人は」

「ああ、そうだよ」

こう言われると自然に誇らしげな顔になっていた。

「ロシア人の人のよさは世界一だよ」

「そうみたいね」

「一度ロシアでじっくり暮らしてみればいいさ。人の温かさに参加して離れられなくなるよ」

「寒いのはね」

「寒いのは気候だけだよ」

「それでももう充分よ」

大山田も随分と言う。

「気候が寒いつつだけで。それもロシアといったら」

「日本の方がずっといいんだね」

「少なくともあそこまで寒くはないわ」

こう述べてみせた。

「日本はね」

「四季があるんだったよな」68

「ええ。春に夏に秋にその冬ね」

「羨ましい話だ」

ロシア人としてはだった。遠いものを見る目で語っていた。

「そんなものがあるなんてな」

「ロシアにだってあるじゃない」

「あつても殆ど冬なんだよ」

彼は言う。

「それこそな。油断したらそれで凍死しそうな冬なんだよ」

「それは知ってるけれど」

「羨ましいよ。その暖かい気候が」

またそれについて述べる。

「こっちにはないものさ。望んでもな」

「人は暖かくてもね」

「そうさ。そればかりはどうしようもない。それに」  
「それに？」

「日本人だってな。親切で欲がなくていい人達ばかりだよな」  
「例外もいるわよ」

「ヴィシネフスカヤの今の言葉には思わせぶりに笑って答える。」  
「言っておくけれど」

「例外は何処にだっているさ」  
「しかし彼はこう言っておればよしとしたのだった。」

「それこそあちこちにな」  
「そうかもね。そうした意味でも人それぞれだから」

「ロシア人にだって悪い奴はいる」  
その通りだった。どの場所にもいい人間もいれば悪い人間もいる。

神もいれば悪魔もいる。彼が言いたいのはそのことであるのだ。  
「そういうものさ」

「そうね。ところで」  
ここで大山田は話を戻してきた。

「どうしたんだ？」  
「今見ているのだけれどね」

「ああ、そつちか」  
話は仕事に戻った。見れば大山田はその望遠鏡で遠くを見ていた。

その氷の集まっている海辺を。じっと見ていたのである。  
「どうだい？どんな氷だい？」

「氷じゃないみたいよ」  
彼女は言うのだった。

「どうやら」  
「！？じゃあ何なんだい？」

「わからないわ。見たことがないわね」  
「見たことがないのかい」

「そうなのよ。あれは動物だけれど」  
「見ながら首を傾げていた。」

「トドでもセイウチでもないし。あれは」

「ラッコでもないよな」

「あんな大きいラッコはいないわよ」

こう答えた。

「何メートルもありそうよ」

「何メートル!？」

首を傾げるヴィシネフスカヤに対して答える。

「ここからだとよくはわからないけれどね」

「何メートルもか」

「そうよ、随分あるわね」

「見てみたくなっただな」

ヴィシネフスカヤもまた興味を持った。興味を持てばいてもたつてもいらなくなるのが人間というものだ。とりわけ見られるのならば余計にだ。

「よし、じゃあ私も」

「見てみるのね」

「うん。あの白い集まりだな」

「そうよ」

念の為に聞いてきた彼に答える。

「あそこよ」

「わかった。それじゃあ」

彼も望遠鏡を取り出して見てみる。するとすぐにその顔が強張っていた。

「まさか」

「まさか?どうしたの?」

「すぐに皆を呼んでくれ」

その強張った顔で大山田に対して告げてきた。

## 第五章

「すぐにだ。皆な」

「急にどうしたの？ 一体」

「ひよっとしたらあれは」

「ええ、あれは」

「まさかとは思うが。けれど」

彼は自分で呟く。半分以上我を失っていた。

「目撃例はあった。だから可能性はあるな」

「とにかく皆を呼ぶのね」

「それでもっと近付こう」

「こつも言うのだった。」

「あそこに。それでいいね」

「ええ、何かよくわからないけれど」

「噂は本当だったのか」

彼はさらに呟く。

「信じてはいなかったけれど。本当に」

「何かよくわからないけれど相当なことなのね」

「相当なんてものじゃない」

叫ばんばかりだった。その声は大山田にも伝わり彼女にも唯ならないことであるのを教えていた。だが彼女はまだあの白いものが何かわかっていなかった。

「あれは」

「そうなの。じゃあ何はともあれ」

「近付く。そして確かめる」

ヴィシネフスカヤの声がさらに強いものになる。

「何としてもね」

「わかったわ。じゃあ皆を呼んで」

「近付こう」

「ええ」

こうして皆を甲板に呼び船を近付けた。そうして彼等が見たその白いものの集まりとは。誰もが己の目を疑わずにはいられないものだった。皆それを見て呆然としていた。

「お、おい嘘だろ」

「まさか。こんな」

「だが。本当だ」

ヴィシネフスカヤは驚きを隠せない仲間達に対して告げる。彼の声も震えていた。

「これは。本当に」

「嘘でしょ、こんなことって」

大山田もその中にいる。今日の前にあるものを見て我が目を疑っていた。仲間達と同じく。

「だってもう」

「絶滅したって言いたいんだな」

「そうよ」

ヴィシネフスカヤに対して答えた。

「十八世紀に。それでどうして」

「二十世紀後半にも目撃例はあった」

ヴィシネフスカヤはその大山田達に対して告げた。その白いもの達を見つつ。

「その時にも。それ以前にも」

「あることはあったのね」

「だが。本当にいるとは私も思わなかった」

彼の声はまだ震えていた。どうしてもそれを抑えられなかったのだ。

「まさかな」

「これは現実のことなのね」

「ウオツカのせいじゃないよな」

「本当に」

大山田だけでなく誰もがそれを疑っている。信じようとはしていなかった。

「違う。断じて違う」

だがヴィシネフスカヤは彼等に対して念押しをしてきた。

「これはな」

「奇跡ね」

大山田はここまで言われてようやく己が今見ているものを信じることにした。ここまで来てようやくといった感じではあったがそれでもだった。

「これって」

「そう、奇跡だ」

ヴィシネフスカヤも言った。

「紛れもなく。奇跡だ」

「そうなの。やっぱり」

「現に見てくれ」

ここでヴィシネフスカヤは皆にそれを見るように声をかけた。

「ほら、彼等は食べている」

「確かに」

「海藻を」

黙々と食べていた。時々息継ぎをする為に海面に顔をあげつつ。その顔もまた見れば言われている通りの顔だった。豚にも似て愛嬌があり。その顔だった。

大きかった。それこそ五メートルを優に超えている。身体は肥えており胴回りも相当なものだ。身体の動きは鈍重で手鰭と尾を使っている。ぷかぷかと海に浮かんでいる感じで何匹も集まって静かに食べ続けていた。

「ステラーカイギユウ」

「まさかここで見るなんて」

「生き残っていたんだ、彼等は」

ヴィネフスカヤの声には感動があった。

「何とかここで」

「そうね。生きていたのね」

「そうだ」

彼は今度は大山田の言葉に頷いた。

「生きていたんだ、ここでずっと」

「私達がそれを知らなかっただけで」

「かつて私達が絶滅させたが。それでもまだ」

生きていたのだった。ここで。彼等はそのことに深い感動を覚えているのだった。

「ねえ」

「何だい？」

あらためて大山田の言葉に応える。

「まだ。ここも捨てたものじゃないわね」

「うん。守るべき自然はまだまだある」

彼女の今の言葉に頷く。

「彼等も残っていた」

「他の動物達もまだまだ」

「残っている。後は彼等を」

「守っていきましょう」

大山田の言葉だった。

「絶滅させて、減らすのが私達なら」

「守って増やすのも私達か」

「そうよ。だからよ」

それが彼女の考えだった。

「このステラーカイギュウも」

「守っていこう」

「ええ。帰ったらまず最初に」

「このことを発表しよう」

彼は言った。

「皆それでいいかな」

「ええ、是非共」

「これは大発見だぞ」

皆それに興奮を抑えきれない顔で賛成する。無理もないことだった。

「本当に生き残っていたなんて」

「まだこんなに自然があつたんだ」

「ああ、そうだ」

ヴィシネフスカヤも言う。ステラーカイギユウだけでなく海牛類というものは豊かで奇麗な自然環境でなければ生きることができない。だから彼等がいるということはその証拠でもあるのだ。

だからこそ。皆笑顔になっているのだった。ヴィシネフスカヤも大山田も。

「これを世界中に伝えよう。そして」

「彼等と彼等がいることのできるこの自然を」

「守っていこう」

皆笑顔で彼の言葉に頷く。これで話はまとまったのだった。最後に大山田が一同に告げた。

「じゃあこのことを早く世界に」

「そうしよう」

ヴィシネフスカヤが応えてすぐにステラーカイギユウの姿が写真に撮られパソコンを通じて世界に流された。世界中がこの世紀の大発見に沸き立ったのは言うまでもない。全ては現実のこと。人々に残されていてそれが見つかった、大きな希望の話であった。

海牛 完

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8068e/>

---

海牛

2009年7月3日19時04分発行